

新聞を人生のパートナーに

100年時代



棚田の再生

神奈川県・丹沢山地の麓、秦野市名古木に美しい棚田がある。NPO法人「自然塾丹沢ドン会」が耕作放棄地を再生し、ことしで二十年目を迎えた。毎週土曜日にシニア世代や家族連れが農作業に汗を流す。さまざまな生き物たちが生息する楽園でもある。

(野呂法夫)



用水路で捕まえたツチカエル

第二の人生かけ

目に鮮やかな緑色の棚田は稲が出穂し、順調に育つ。日差しは強いが、風は心地良い。沢水を集めて流れる用水路で、会のもとめ役、金田克彦さん(左)と東京都市並区は素早く網を入れて何かを捕まえた。

「ツチカエルです。小さくてイボイボがあるけど、かわいいでしょ」と笑う。

会は二〇二一年、荒れた棚田を農家から借りて開墾した。除草剤や化学肥料は使わず、手作業で草取りをする。冬季も一部で水を張ると、かつていた生き物たちが再び姿を現した。

昨年一月末、新しくつたヒオトフ(生物生息空間)にヤマアカカエルの卵塊があり、春には無数のオタマジャクシに。「次第に数を減らしていたけど、タイコウチやアカハライモリなどが捕食していました」と横浜市に住む丹藤敏三さん(左)は話す。こつた生き物が命をつなぐ連鎖は人間が耕し続ける共生の証し。昆虫を餌とするカエルが、シマヘビやアオダイショウに狙われ、そのヘビは棚田の生態系の頂点に立つ猛禽類のノスリなどに捕食される。

「暑いとヘビは涼しそうに泳いでいますよ」と金田さんに促され、眸から目を凝らし

丹沢麓で「自然塾」20年 生き物と共生



た。イネの葉にイトトンボやイナゴの幼生が止まる。コナギの葉の上にはいたキクツキコモリグモが水辺を走る。ヘビにはお目にかかれなかったが、シオカラトンボが飛んでいた。

会は〇四年に都市住民と農村を結ぶ「丹沢自然塾」を開講した。参加者は会員を含め九十家族、百五十人。最寄り小田急線秦野駅からバスを乗り継いで集まる。

金田さんと丹藤さんは第一

回の自然塾メンバーで、定年の第二の人生を棚田の米作りとともに歩んできた。丹藤さんは元公務員で福島県西会津町の出身。「ここには古里と同じ自然と景色があり、ついつい十八年も長居し、毎週土曜に農作業するのが楽しみです」

損害保険会社に勤めた金田さんも「都会から離れた自然の中で体を動かし、心身ともくつろぐのが健康の秘訣。生きるリズムとなり長寿にはいいですね」。

メンバーは女性も多い。相模原市の千葉恵子さん(左)は「この良さは『三間』です。心安らぐ自然の空間、時間、仲間の三つとも満たされて、幸せです」と語る。

あずまやで頂いた冷たい麦茶がうまい。自家栽培した大麦を煎ったという。お米もおいしいと評判だ。鎌での稲刈りと天日干しのためのハザ掛けは二十七枚の棚田が黄色に染まった九月中に行われる。

名古木の棚田で談笑する(左から)丹藤敏三さん、千葉恵子さん、金田克彦さん。神奈川県秦野市で



カヤネズミ

「棚田の生き物図鑑より」(鳥居拓輝氏撮影)

自然塾丹沢ドン会は2017年から3年間、東海大人間環境学科と慶応大ノ瀬研究室に協力を求め、棚田の自然調査を行った。

カヤネズミ、オオムラサキ… 838種の生息確認

植物252種、クモを除き昆虫484種、哺乳類と両生類・爬虫類各15種、鳥類72種の計838種を記録した。

神奈川県の準絶滅危惧種として日本一小さいカヤネズミ、国蝶のオオムラサキなど37種が確認された。

一方、駆除が必要な外来種は4種。繁殖力の強いセイタカアワダチソウは秋に引き抜き、ススキも増えている。調査結果は自然観察ハンドブック「丹沢山ろく名古木 棚田の生き物図鑑」(夢工房)として9月に出版する。税別2000円。

同会理事長の片桐務さん(71)は「名古木の自然の魅力、生物多様性の現状を知り、棚田の原風景を次の世代に引き継ぐためのテキストとして活用してもらえれば」と語る。問い合わせは片桐さんへ。電話090(7212)0573。